

ゆきてかへらぬ

中原中也の愛

ゆきてかへらぬ

中原中也との愛

講談社

護編

ゆきてかへらぬ

中原中也との愛

1974年10月20日 第1刷発行

1975年2月10日 第3刷発行

著者 長谷川泰子述・村上護編

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社



© 長谷川泰子・村上護 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえしました。

定価はカバーに表示してあります (企)

目次

I

風が立ち波が騒ぎ

同棲 9

広島女学校 19

女優志望 29

ダンディズム 40

Ⅱ

これがどうなろうと

詩人修行

.....53

相聞

.....64

転居

.....75

失跡

.....86

Ⅲ

私の聖母！

サンタ・マリア

築地小劇場

.....99

Ⅳ

松竹蒲田	109
思想の里	120
溜り場	131
かくは悲しく生きん世に	
子供	143
グレタ・ガルボに似た女	152
青山学校	161

V

酒場「エスパニョール」……………171

せめて死の時には

結婚……………183

追悼……………192

述懐……………202

解説 村上護……………220

装幀 丹阿弥丹波子

ゆきてかへらぬ

——中原中也の愛——

I

風が立ち浪が騒ぎ

風が立ち、浪が騒ぎ、

無限の前に腕を振る。

その間、小さな紅の花が見えはするが、

それもやがては潰れてしまふ。

風が立ち、浪が騒ぎ、

無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて

酷白な嘆息するのも幾たびであらう……

（中原中也「盲目の秋」より）

同棲

明治四十年四月二十九日山口に生る。

同年十一月三日山口を出発六日大連着。終列車にて旅順に赴く。二ヶ月半の後柳樹屯に赴く。其の年十月山口に帰る。翌四十二年二月下旬、広島に赴く。其の年の暮の頃よりのこと大概記憶す。大正元年金沢に赴く。三年三月の末山口に帰る。四月下宇野令小学校入学。七年五月山口師範附屬に転校。九年四月山口中学入学。十二年三月、即ち三年生にして美事に落第。同年四月京都立命館中学に編入。十三年四月十七日三つ年上の女と同棲。

(原文のまま)

(中原中也「履歴書」より)

中原中にもはじめて会ったのは、京都の表現座という劇団の稽古場でした。大正十二年末だ

ったと思います。

私はその劇団員になって、「有島武郎、死とその前後」という芝居の台本読みをしていた頃でした。そこに中原はあらわれたんです。

中原は薄暗い稽古場の椅子にチヨコンと坐って、私たちの練習風景をみていました。はじめは氣にとめるといふほどではなく、小さな中学生だなど思う程度でした。

誰かと話すついでに、中原は私にも声をかけてきました。話題は、すぐ詩のことになって、これがダダの詩だよ、とノートを見せてくれたりしました。

大学ノートに書いてあったそれらの詩を思い出すと、ダダダダ……というような感じでしました。音を表現しているような片カナが、多く書きこまれていたような氣がします。

「おもしろいじゃないの」

私がそういうと、あの人は自分の詩を理解してもらえたと思ったのか、身を乗り出してきました。けど、私にそんな詩がわかるわけがありません。見せられた詩は、これまで私が読んだ詩とはちがう感じでしたから、どういふことからそんな詩になったのか、私にはわかりませんでした。ただ字づらがおもしろかったから、おもしろいわね、といったんです。中原はともかく詩の話に熱心で、私もそんな雰囲氣がきらいじゃなかったから、意氣投合したんでしよう。それからはしょっちゅう会うようになりました。

中原がどうして表現座に来るようになったのか、よくわかりません。バイオリンを弾きなが

ら全国を流して歩いてきた大空詩人の永井叔^{しゅう}さんが、はじめは連れて来たんじゃないかと思うんです。

表現座に私を連れて来たのも永井さんでした。あの人は中原とも、いつか顔なじみになっていました。その出会いは永井さんがバイオリンを街角で弾いていたら、おじさんおもしろいね、と中原が近づいて来たのだと聞きました。そんな出会いで二人は知り合い、永井さんは中原の下宿に遊びに行ったり、表現座の稽古場に彼を連れて来たりしたんだと思います。

表現座というのは、京大の教授だった成瀬^{なるせ}無極^{むきよく}が主宰した新劇でした。おそらく成瀬主宰は名ばかりで、会ったことはありません。座の中心は倉田^{くらた}啓明^{けいめい}さんだったようで、彼が住んでいた家が表現座の稽古場でした。私もそこに住みこんで、お芝居の練習していました。

表現座の稽古場というのは、二階屋の一階で、昔はみなそうだったけど、表に源氏格子があつて薄暗いんです。一部土間になっており、稽古場に使っていたところはあまり広くなかったと思います。

二階は全部畳の間で、往来に面して部屋があり、それから奥にわりに広い感じの部屋がふた部屋ほどありました。そこにわれわれが寝泊りしておりました。

私のほか何人か住んでいました。関東大震災で京都に移った人がほとんどで、高橋という俳優もやっぱり東京からの移動組で三十過ぎだったでしょう。私は二十歳になったばかりでしたからちょっと年輩に感じましたが、その高橋さんが立役者で有島武郎の役をやり、私がその

奥さん役で、肺病で死ぬところを芝居でやったんです。

稽古のあい間には、お勝手のことなどもしました。私は神経質だからおネギなんかこまかく切れないんで、恐る恐るやっていたら、高橋さんは、

「俳優になろうという人が、そんなことじゃダメだね」

といていました。

私には包丁がうまく使えなかったけれど、どんな役でもこなせる女優になるためには、これも修行と努力しました。

表現座というのは、どれくらい続いたんでしょうか、はじめ倉田さんが中心で、あとは野口という人がやったんです。それで数カ月続いたのかな、京都の公会堂で第一回公演をやっただけで解散することになってしまいました。

表現座が駄目になってからも行くところがないから、そこにとどまっておりましたが、間もなくマキノ・プロに入りました。私をそこへ紹介したのは永井叔さんで、保証人も彼がなってくれました。永井さんという人はなんとなく不思議な人で、こちらからは情報がつかめないけど、むこうから何かのときに現われて、力になってくれました。

表現座がつぶれたのち、中原も私のことを心配してくれて、「ぼくの部屋に来ていてもいいよ」といってくれたんです。その頃になると、私はお金もなく途方に暮れていましたから、そのことばに甘えました。

私が行った中原の下宿は、北野のあたり大將軍西町で、隣りに椿寺という古い寺がありました。その下宿屋は新しく、廊下も広く、料理屋みたいに立派でした。まだ庭の築山もできていないような時だったけど、下宿人はいっぱいでした。

私たちは二階の六疊にいて、奇妙な共同生活がはじまったんです。夜は部屋のはじとはじとに寢床をとって寝ておりました。もうそのとき、中原はダダイストを気取っていました。

中原は私より年下で、まだ中学生だったんですけど、もう女郎屋へ行ったりしていたようです。中原は紺の筒袖を着ていたのを覚えておりますが、私と二人で四条の通りを歩いていき、ふと立ち止って、こういったのを思い出します。

「ちょっと、女郎を買いに行つて来るよ」

中原は私に構わず、街灯があまり明るくない細い通りへ入って行きました。そこは宮川町のはずだけど、私はそのとき宮川町と聞いただけじゃ、何のことだかわかりません。中原がはつきり「女郎を買いに行つてくるよ」といったもんですから、不思議なことをいう人だと思ひながら、そのうしろ姿をずっと見ておりました。筒袖着た子供のような男が、下駄の音をひびかせ、薄暗い路地へと消えていく光景は不思議のようにも思えました。はじめは冗談いつているのだろうと思つて、そこにしばらく立つて待つていましたが、なかなか戻って来ません。ほんとに女郎買いに行つたんだと思い、待つてる自分が阿呆らしくなつて、私はさっさと家に帰りました。

中原は間もなく帰って来て、照れながら、ニヤニヤ笑っておりました。そんなことがあったのち、中原はある晩、私をおそってきたのです。そのところは、みなさんから興味深く聞かれますがあまり話したくありません。

大岡さんは「殆んど強姦されちゃったようなものだよ」と私がいったと雑誌（「群像」昭和三十一年一月号）に書かれておりますが、あれは仲間うちでの話だったんです。

ほかの言葉でうまくいえなくて、強姦されたといっちゃったけど、考えてみれば男と女がひとつ部屋で寝泊りしていたのですから、強姦されたというのはおかしいし、肉体を求められても仕方なかったことかもしれません。私はその頃はまだ性に無頓着で、下宿においてやるよという親切心だけを信じて、そこへ行ったんですから、中原の求めるままに、身体をまかすのはつらく感じました。自分の生活があまりにみじめに思えて、気の滅入ることが多くありました。

マキノ・プロでの私はチョイ役で、それを仕出ししだしといっておりましたが、その他多勢おおぜいで出演しておりました。日本髪で、御殿女中のような恰好かっこうして、元禄花見踊りをやったこともありません。

私はおしろいぬって、顔を白くするのがきらいだったので、女学校を卒業してからもお化粧などしませんでした。けど、撮影のときはどうしてもつけないといけないんです。いまなら肌色のドーランでしょうが、あの頃はおしろいを水で溶いて、刷毛はけで塗っておりました。はじめ